

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

ユーラシアに擡頭する巨大中国

軍拡の道に情熱を燃やす中国
 中国の民主化運動の根底には「民主化」という美名の言葉を巧みに使っている。「軍拡への情熱」が隠されている。これが多くの日本人が見逃している現実であり、民主化運動を展開する運動指導者は北京政府の国家安全部と一蓮托生である。

これを二〇〇丁、大連からカルフォルニアのオークランド港に密輸した事があった。更には、携帯用対空ミサイルのステインガーとともに、密輸捜査で張り込んでいたFBIの捜査官に売り付けようとした事件が発覚した。

これ等の会社の株式会社で言えば社長に匹敵するのが総経理であり、また副社長に匹敵するのが副経理であるが、この両方を勤めていたのが元国家安全部副部長の王震の息子の王軍であった。

また、それに続く公司幹部は、賀平(トウ小平の娘トシユンの婿)、当時人民解放軍総参謀部装備部長(元)や、王小朝(元国家安全部の楊尚昆の娘婿)らの太子党の高級メンバーであった。こうした密輸に関する事件を見ただけでも、太子党の役割が何であるか、その本質は容易に窺えるはずである。国家規模で武器密輸に加わり、一方で民主主義を標榜しながら、実際には武器の密輸を企むのである。

また、「愛国華僑」という感情を全面に出して活動しているスローガンを掲げる集団も、太子党と何らかの繋がりを持ち、水面下で彼等の走狗となっている。そして走狗するこれらの下部組織が集金する金額は途方もなく大きい。

太子党の高級メンバーや愛国華僑と称する集団の幹部は、銀行や証券会社にも詳しく、また株式市場の実態にも精通しており、更には替レートの動きにも敏感で、世界動向を把握し、生まれながらの特権を利用して欧米の資本主義国家を自在に泳ぎ渡る事のできる赤い貴族達である。

彼等赤い貴族達は、単にこうした世界動向に精通しているばかりでなく、日中貿易絡みで、日本の大手商社から多額のリベートを要求する、特権に物を言わせる集団でもある。彼等が日本に来日する目的は、日本商社と利益配分する為の交渉であり、この利益やリベートはその一部が国家安全部へ

を全滅させてはならない。抵抗した一部の軍関係者を戦犯として処刑した後は、敗戦国民を「解放」という名目で解き放つ事が肝心であり、この事を戦勝国の指導者達はよく心得ている。核弾頭ミサイルで台湾や日本を全滅させてしまつては、戦後の経済効果が期待できないのである。

その為に、ミサイルを飛ばす事よりは中国人民の精神教育を支える一環として「記念館工程」なるものを作り上げ、自国が日本によって過酷な戦争経験をしたと言ふ歴史的な資料を展示し、「これだけ酷い目に遭わされた」と言ふ人民の怒りを利用する作戦に転じているのである。これを中国では「心理戦」と定義している。

したがって現在中国大陸の至る所では、こうした戦争記念館が着々と工事を進め、これを人民に公開して人民の闘志を奮い立たせ

を全滅させてはならない。抵抗した一部の軍関係者を戦犯として処刑した後は、敗戦国民を「解放」という名目で解き放つ事が肝心であり、この事を戦勝国の指導者達はよく心得ている。核弾頭ミサイルで台湾や日本を全滅させてしまつては、戦後の経済効果が期待できないのである。

その為に、ミサイルを飛ばす事よりは中国人民の精神教育を支える一環として「記念館工程」なるものを作り上げ、自国が日本によって過酷な戦争経験をしたと言ふ歴史的な資料を展示し、「これだけ酷い目に遭わされた」と言ふ人民の怒りを利用する作戦に転じているのである。これを中国では「心理戦」と定義している。

したがって現在中国大陸の至る所では、こうした戦争記念館が着々と工事を進め、これを人民に公開して人民の闘志を奮い立たせ

を全滅させてはならない。抵抗した一部の軍関係者を戦犯として処刑した後は、敗戦国民を「解放」という名目で解き放つ事が肝心であり、この事を戦勝国の指導者達はよく心得ている。核弾頭ミサイルで台湾や日本を全滅させてしまつては、戦後の経済効果が期待できないのである。

その為に、ミサイルを飛ばす事よりは中国人民の精神教育を支える一環として「記念館工程」なるものを作り上げ、自国が日本によって過酷な戦争経験をしたと言ふ歴史的な資料を展示し、「これだけ酷い目に遭わされた」と言ふ人民の怒りを利用する作戦に転じているのである。これを中国では「心理戦」と定義している。

したがって現在中国大陸の至る所では、こうした戦争記念館が着々と工事を進め、これを人民に公開して人民の闘志を奮い立たせ

戦争と宗教の連動

(その四十八) 米国イオンド大学教授 曾川和翁

戦争への閉ざされた扉

戦争はなぜ起るのか。なぜ人間は戦争をするのか。そして人間は争わずに入らぬか。これまで多くの学者がこの問題について様々な角度から研究し、その答えを出そうとして来た。しかし近代を経て、現代に至つて今日でも、戦争は影を潜めない。むしろこれ迄世界各地で燦々とした戦争の火種が、発火するのではないかと懸念さえある世界状況である。

有史以来の人類の歴史を振り返れば、それは紛れもなく戦争の歴史であった。現代に至つても、人類は武力の行使を行わずに、様々な政治問題を解決できるほど、進化していかないのである。そうした中であつて、繰り返して「戦争は何故起るのか」、「どうして人間は戦争をやめられないのか」という様々な答えと嘆きを導きながら、それについて明確な答えを出し切れないうち、

一方「戦争は地獄だ」とい

る精神教育に利用しているのだから。この効果こそ大きく、かつて敵国であつた日本国民に自虐的な感情に陥れ、かつ、日本政府に対しては跪かせ、多額な金を貢がせ、敵対したり対抗したりする素振りを見せれば、「一戦も辞さぬ」というポーズを取るのだから。そして中国が軍拡を展開するその証拠は、不透明な軍事予算であり中国独自の軍事同盟を企んでいるという事である。

中国が民主主義を表に打ち出し、こうしたポーズはあくまで隠れ蓑に過ぎない。

中国の軍拡としての進むべき路線は、薄一波と宋平の二人の保守派の長老が現わした。「国家安全」に論じられている国家戦略が明白に物語っているように、人は生まれつき強者を尊敬するものであると言ふ基本理念で貫かれていよう、中国こそ強者であり、中華

つ、栄光が戦争の中にある!」とか「戦争が芸術だ」といった歴代の為政者が居た。これ等の回答は、間違いではなく、実に多様な姿を見せた。

さて、人類の戦争の歴史を振り返れば、約紀元前二万年頃から弓矢と言ふ人類初の投擲武器が考え出され、武器革命がこの時代に起つた事を現わしている。そしてその後の、十字軍の遠征は「宗教と戦争」の歴史を明白に語り、種々の問いがその歴史の中に含まれている。一方戦争は、破壊と共に文明の発達を促し、「文明」と言つた名で、人類に様々な恩恵を与えて来た。戦争は人類に大量の血を流させたが、同時にこれを通じて物質文明の豊かになる礎にもなつたのである。例えばペルシャは世界最初の海軍を創始し、その発展の中に今日に至る大航海時代の開幕に寄与し、また、第一次世界大戦では航空機を登場させ、これによって驚異的な交通手段を今日の人類に齎している。例えば、第一次世界大戦におけるドイツ軍の第70高地への反撃はドイツ空軍が行つた爆撃攻撃によるものだった。

歴史を工学的に科学する

〒802-0985
 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
 (尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所
 093(962)7802 FAX093(961)8224
 Eメール: science@daitouryu.com



九州科学技術研究所
 Kyushu Technology Institute

九州科学技術研究所 URL
<http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/>

大東流霊的食養道HP
www.daitouryu.com/syokuyou/

癒しの杜の会HP
www.daitouryu.com/iyashi/